[論文]

社会・文化的要素を踏まえたタイ語教授法に関する一考察[1]
ー 人称表現・呼びかけ表現[2]を事例として ー

A Study of Thai Language Teaching Methods Considering Social and Cultural Elements
– A Case Study of Person Terms and Address Terms –

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン（齋藤）
Sunisa Wittayapanyanon (Saito)

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies(3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

要旨: 本研究は、外国語としてのタイ語教育のグローバル・スタンダード化への貢献を見据え、教育カリキュラムの中に反映すべきタイ語特有の社会・文化的要素の 1 つとして人称表現・呼びかけ表現に焦点を当て、その教授法に関する提案を試みたものである。タイ語では多様な人称表現・呼びかけ表現の適切な運用が重要となるが、現在のタイ語教育ではそれらのプラグマティクス的側面からの説明が不十分である。タイ語母語話者を対象とした人称表現・呼びかけ表現の使用意識に関する調査結果をもとに、様々な場面に応じて使用される語の選定基準・優先順位・プロセスを学習するための教授法案を提示している。加えて、タイ語特有の社会・文化的特性を反映した発話者と対話者/第三者との年齢差・社会役割などを示す「垂直的ポライトネス」と、両者の親疎を示す「水平的ポライトネス」の 2 軸を可視化したツールが有用であるとも述べている。

Abstract: This study aims to propose teaching methods for person terms and address terms in order to contribute to the creation of global standards of teaching Thai as a foreign language, as person terms and address terms are social and cultural elements specific to the Thai language that must be incorporated into the Thai language curriculum. The appropriate use of such terms is integral for communication in Thai because of the language's inherent diversity; however, the explanation of these terms in Thai education programs is not sufficient from a pragmatic perspective. This paper suggests teaching methods for this topic based on survey results from Thai native speakers regarding such terms; the methods include criteria and priority and the process of selecting appropriate expressions corresponding to various situations. In addition, it would be useful to apply a framework that visualize two axes of politeness specific to the Thai language; one axis is "vertical politeness," which shows the relative age difference and social roles between the speaker and the interlocutor/third person, and the other axis is "horizontal politeness," which shows the closeness or intimacy between the two.

キーワード:外国語としてのタイ語教育、CEFR、人称表現、呼びかけ表現、タイ語のポライトネス
Keywords: Teaching Thai as a Foreign Language, CEFR, Person Terms, Address Terms, Politeness in Thai

1. はじめに

本研究は、ヨーロッパ言語共通参照枠組み(Common European Framework of Reference for Languages：以下、CEFR)を、外国語としてのタイ語教育に効果的に適用するための検証の一環となるが、本稿ではそ

[1] 本研究は JSPS 科研費 JP18H00686、JP17H02331、JP20H01255 の助成を受けたものである。
[2] 本稿では次に挙げる(1)～(4)をまとめて「人称表現・呼びかけ表現」と呼ぶこととする。
(1) 人称代名詞 personal pronoun　例) chán「女性の一人称表現」、kháw「三人称表現」
(2) 親族名称 kin term　例) phîi「兄/姉」、nɔ́ɔŋ「弟/妹」
(3) 愛称、名前などの固有名詞 personal names　例)ニックネーム、本名
(4) 職業名称 occupational titles　例) ʔaa-caan, khruu「先生(教職)」、mɔ̌ɔ「医者」

の中でもタイ語のコミュニケーションの要素として特に重要と筆者が捉えている人称表現と呼びかけ表現に焦点を当てている。

タイでは、2015 年末の ASEAN 経済統合体の発足による地域社会の変化と、それに伴う語学教育のニーズの変化への対応が求められている。東南アジア地域での共通語は基本的には英語となるが、この地域社会の変化により、訪タイ目的が、観光や知的階層の英語での交流にとどまらず、労働者の流入など多様化が進み、外国語としてのタイ語教育に注目が集まっている。そういった状況も踏まえ、2015 年 5 月、タイ教育省高等教育局(the Office of the Higher Education Commission, Ministry of Education)が主催し、ASEAN＋3(日本、中国、韓国)におけるタイ語教育に関する国際会議が開かれ、筆者も含め、各国の大学でタイ語教育に携わる関係者が参加した。その中の議題の 1 つとして外国語としてのタイ語教育のグローバル・スタンダードの設定が重要な課題の 1 つとして位置づけられ、国語教育の延長ではなく、外国語としてのタイ語教育の重要性が政府、及び教育関係者の間で確認された(スニサー 2017a:171)。しかしながら、タイ国内には未だ言語学会やタイ語教育学会は存在せず、言語学者によるタイ語の理論的研究とタイ語教師によるタイ語教育の実践を強く結びつけるものがない状態であり(高橋 2014:486)、外国語としてのタイ語教育メソッドは体系化されておらず、関連する研究もタイ国内を含め、あまり見当たらない状況であるとともに、外国人向けの教材・教育法の開発も個々の研究者、教育者の裁量に委ねられている状況である。

そこで、本研究では外国語としてのタイ語教育のグローバル・スタンダード化に貢献するためのアプローチの 1 つとして、CEFR を参照することを試みている。EU の地域統合の目標が、国家間の垣根を下げ、地域間の経済・人的交流の活性化を促進して全体の発展を目指すことであり、この目標が東南アジア諸国連合の目標と共通しているためである。2001 年、欧州評議会で EU 内の外国語教育基準として採択された CEFR は、多くの国で取り入られ、語学講座や授業計画、教育課程、資格取得などに適用されている。CEFR は 2001 年に出版されたドイツ語版を始め、各国で翻訳された他、日本では 2004 年に、韓国では 2007 年に翻訳版が出版されるなど、アジア地域における CEFR の応用も活発になりつつある(ソ 2014:39)。東京外国語大学では 2008 年に設立された英語学習センターと、2009 年に設置された世界言語社会教育センターにおいて、CEFR を日本の高等教育へ応用するための準備研究を行ってきているが、アジア地域に関しては、特に 2012 年より「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」プロジェクトが推進されている。CEFR の適用は欧州圏内から世界各地の教育関係機関に拡がりつつあり、言語教育の理念を問い直す機会を与えている一方で、EU では CEFR の大幅な見直しを進めており、2018 年 2 月には CEFR, Companion Volume with New Descriptors として改訂・追補版(以下、CEFR2018) を公開して、新たに多様な社会文化的背景を前提とする言語コミュニケーション能力の測定法に関わる能力記述項目を提案している。CEFR は生まれ故郷である EU 地域の言語・文化・社会的特質を受け継ぐ以上、CEFR のアジア諸語への適用可能に際しては、非 EU 世界のそれとの隔たりの自覚が生まれつつあり、非 EU 諸国、特にアジア諸国での CEFR 導入については、直感的な反発、すなわち EU では有効な基準かもしれないが、アジアの諸言語にはそのまま適用しうるのか、といった反発が見られている。そのため、書記体系や音声組織、さらに文法構造や談話ストラテジーが大きく異なるアジア諸語への適用には、言語社会文化的な特徴を勘案して柔軟な適用が必要となることが想定され(富盛 & Yi 2016:1-2)、CEFR を効果的にタイ語教育に活用するためには、タイ語特有の要素を鑑みる必要がある。

タイ語特有の要素には、大きく声調を含む音韻体系やタイ文字による独自の書記体系といった言語的要素とコミュニケーション的側面からの社会・文化的要素がある。スニサー(2017b:231-250)では、特にタイ語でのコミュニケーションの中で見られる特有の社会・文化的要素に焦点を当て、タイ語特有の社会・文化的要素の検証を行った。次に、そこで提示されたタイ語特有の社会・文化的要素と CEFR2018

で新たに提示された Sociolinguistic Appropriateness とを組み合わせ、暫定版としてのレベル分けと能力評価項目の作成を試みた。これらの検証を通して見えてきたものとして、タイ語でのコミュニケーションにおいては、縦方向と横方向から成る 2 軸のポライトネス構造を踏まえた言語運用が必要となること、そして、この 2 軸のポライトネス構造が顕著に表れ、それを適切かつ便宜的に示すことが可能な人称表現や呼びかけ表現がタイ語運用においては非常に重要な要素となっている(スニサー&富盛 2020:101-112)。

今後、タイ語版 CEFR の検討を進めていくに当たっては、その中に人称表現・呼びかけ表現の教授方法を適切に織り込むことが必要であると考えているが、その教授方法の一案について本稿では提案を試みている。また、人称表現・呼びかけ表現に関する教授方法を確立するためには課題もいくつかあるとも捉えており、それらの課題に加え、タイ語版 CEFR 構築に向けたその他の課題についても言及している。

2. タイ語コミュニケーションに見られる社会・文化的特徴

CEFR のアジア諸語への適用を検証する研究のひとつとして、タイ語をケーススタディとするスニサー(2017b:242-250)では、日本語母語話者を対象としたタイ語教育に CEFR を効果的に適用するために考慮すべきタイ語特有の社会・文化的要素の検証を行っている。その中で、タイ語でのコミュニケーションに見られる社会・文化的特徴として、(1)相手との位置関係の確認、(2)距離の操作、(3)人間関係を保つための配慮、(4)相手に負担をかける場合の働きかけ、(5)文体の操作、の 5 点を指摘している。そして、富盛(2020:110)の中では、タイ語コミュニケーションにおける社会文化的適切性のレベルと能力評価項目の検討を行っている。CEFR2018 で新たに提示された Sociolinguistic Appropriateness とスニサー(2017b:242-250)で示されたタイ語特有の社会・文化的要素を組み合わせ、暫定的ではあるが、タイ語版としてのレベル分けと能力評価項目「タイ語コミュニケーションにおける社会・文化的適切性のレベルと能力評価項目」を作成した。本稿では便宜上、以降これを言及する際は「タイ語暫定版 2018」と仮称する。「タイ語暫定版 2018」でのレベル分けは、CEFR に準じて A1～C2 の 6 段階とし、各レベルでのタスク項目数は A1＝14、A2＝8、B1＝5、B2＝4、C1＝7、C2＝4 となっている。「タイ語暫定版 2018」の全容については、表 1 の通りである。

表 1 タイ語コミュニケーションにおける社会・文化的適切性のレベルと能力評価項目 （タイ語暫定版 2018）

A1

言語行動のタスク	社会文化的方略	能力を判断する手がかり (Descriptors)	タイ語の社会文化的特質の補足的説明 (Thai Supplements)
定型句で挨拶する	定型表現により人間関係を配慮する	人間関係に応じて、定型句など失礼にならない程度の挨拶表現を使うことができる。	挨拶の構成要素＝定型句、人称表現、終結小辞。
相手についてほめる	言語的に好意を示すことで円滑になる	相手の外見、言動で気付いた点を一言、ほめることができる。	気付いた点を単語一言で良いので、コミュニケーションのきっかけとする。
人称表現を使う	相手との社会位置的関係で礼儀を保つ	相手との関係を考慮し、失礼にならない程度、人称表現を使うことができる。	自己紹介したり、簡単なやりとりをする際には相手との関係で失礼にならない程度の人称表現を用いる。(注：親族名称、愛称については個別に以下の 2 タスクで言及)
親族名の呼称を用いる	親族名で呼ぶことで相手との距離を縮める	相手との心的距離を縮める適切な呼称を使える。	疑似親族意識が強く、「おばあさん」「おじいさん」「子どもたち」といった親族名を使って相手を呼ぶ範囲が広い。表現上の丁寧さを示す呼称を使い続けていると、相手との距離が縮まらない。

愛称を用いる	相手の愛称を知り、積極的に用いることで相手との個人的距離を縮める	相手の愛称を尋ねて、愛称を適切に使うことができる。	ほぼ全てのタイ人は生まれた時に愛称をつけられる。家族、友人だけではなく、職場でも普通に愛称が使用され、状況によっては一人称としても愛称を使うことが一般的。本名よりも愛称で呼び合う方が、距離が近い印象となる。逆に相手の愛称を聞かないと、距離を置かれている印象となる。
丁寧小辞を使う	丁寧小辞を使うことで人間関係に配慮する	丁寧小辞を適切に使うことができる。	終結小辞として、節や語の末尾につける他、単独で返事に使用し、話し手の発話を、丁寧、礼儀正しい、思慮深い、柔和といった印象を与えるものとする。そのため、自らの高い社会的地位や立場に相応しい印象を与えるためにも使用する。
文体差（性別）を区別する	男女の文体の違いを理解して配慮する	終結小辞や人称表現により男女の文体の差を区別できる。	終結小辞や人称表現で差別化を行うが、語彙に大きな差はない。
自分のことを説明する	自身のプライバシーを共有することで心理的距離を縮める	名前や年齢、職業などの基本的な自己紹介が出来る。	年齢や職業、出身地など、出来る限り、具体的なことを自発的に言うことで、相手との距離が縮まる。
年齢を話題にする	社会的立場の確認。	自分の年齢を伝えることができ、相手の年齢を聞くことができる。	タイ語の特徴として、相手の年齢に応じて、人称表現を変化させる必要がある他、言葉遣いや行動も変化する。
家族を話題にする	相手のプライバシーに敢えて踏み込むことで心理的距離を縮める	家族構成などプライベートなことを尋ねて、または返答ができる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮めた上で、そこで入手した情報をもとに、今後のコミュニケーションにも活用し、より良い関係構築を行う。
住んでいるところや出身地を話題にする	相手のプライバシーに敢えて踏み込むことで心理的距離を縮める	失礼にならいレベルで相手の住んでいるところや出身地を確認できる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手の距離を縮める。
社会的地位を話題にする	社会的立場の確認をして適切な社会関係を構築する	相手の社会的立場（職業、学歴など）を確認できる。	社会的地位、特に職業については、適切な呼称のために必要。学歴も相手との距離感を形成する上で大きな影響を及ぼす。同窓の場合、仲間意識、共感が強まり、それによって付き合い方や言語行動（人称代名詞、終結小辞）などが変わる。
謝罪する	定型句を用いつつ謝罪を受け入れる態度を示して相手との関係を保つ	謝罪の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	対人関係や謝罪の度合いによって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。謝罪を受ける場合、相手側に責任がある場合であっても、まずこちら側が許すということを伝えるのが一般的な行為。
感謝する・理解する	定型句を用いて謝意を大きく示して相手との関係をよりよくする	感謝の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	対人関係や感謝の度合いによって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。

A2

言語行動のタスク	社会文化的方略	能力を判断する手がかり (Descriptors)	タイ語の社会文化的特質の補足的説明 (Thai Supplements)
一言添えて表現・行動をする	相手との心理的距離を縮める	対話者に応じて、適切な合掌礼、及び定型句＋α の一言を添えることができる。	+α の一言＝家族の近況を聞く、外見をほめることなどで対話者との距離を縮めることができる。
年齢確認をする	相手との社会的立場の確認ができる	相手の年齢を婉曲的に聞くことができる。	単純に年齢を聞くだけでなく、相手との関係性によって、卒業年、誕生年、干支等、聞き方を変えることもある。
年齢差による表現を用いる	タイ語特有の文体差により人間関係を保つ	相手との年齢差で文体を変えることができる。	目上の相手には、終結小辞の１つである丁寧小辞を使用する。年下の方は一人称も変化する。また、年上の方は、相手に気を使わせないため、カジュアルな終結小辞を使用する等。

家族の話題を取り上げる	相手との心理的距離を縮める	家族に関する話をすることができる。	家族孝行の話は好意的に受け止められ、話題となることが多い。
趣味・好みを話題にする	相手との距離を縮める	相手の趣味や好みを聞くことができる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手の距離を縮める。
（売買などで）交渉する	タイの慣習にあった表現で円滑に交渉する	市場などでものを買う時、値段、数量や品目の交渉ができる。	市場等での値引き交渉は一般的であるが、定価が表示されているデパート、スーパー、コンビニ等では行わない。
依頼をする・理解する	人間関係に従った定型句で礼儀を保つ	定型句を用いて失礼にならないよう依頼することができる。	相手との心的距離によって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。
勧誘を受け入れる	謙遜な態度を示して相手に負担をかけない	礼儀正しく勧誘を受け入れることができる。	すぐに勧誘を受け入れるのではなく、数回遠慮した後に受け入れるのが一般的。

B1

言語行動のタスク	社会文化的方略	能力を判断する手がかり (Descriptors)	タイ語の社会文化的特質の補足的説明 (Thai Supplements)
依頼をする・理解する	適切な表現で相手に受け入れてもらう	内容に応じて適切に表現で依頼することができる。	依頼内容の重軽に応じて、対価を予め提示するなど、相手が快く依頼を受け入れる表現。
勧誘・提案をする	誠意を見せ相手に好意を示して誘う	相手に伝わるように、積極的な勧誘・提案ができる。	謙遜はあまりせずに、ポジティブな要素を述べて、誠意を全面的に見せながら誘う。かつ相手側の社交辞令的遠慮を理解した上で積極的に対応する必要がある。
依頼・勧誘・提案を断る	避けられない事情を話して負担をかけない	相手が納得できる内容で依頼、勧誘・提案を断ることができる。	直接的な断り方はあまりしない。どうしても断らざるを得ない時には、丁寧に断り、謝罪した後、断りの理由を添える。納得し易い理由として、お寺に行くことや家族の事情などがある。
謝罪をする・理解する	適切な表現で相手との関係を保つ	タイでの謝罪行動を理解し、適切に応じることができるともに、自らも適切に謝罪することができる。	「すいません」に該当する直接的な謝罪表現だけではなく、むしろ婉曲的な表現が好まれる場合も多い。
感謝する・理解する	適切な表現で人間関係を良好に保つ	タイでの感謝行動を理解し、適切に応じることができるともに、自らも適切に感謝することができる。	感謝は一度に大きく言い、後日、改めて言うことは少ない。定型句の謝辞表現の代わりに、ほめることなどで感謝を表すことがある。

B2

言語行動のタスク	社会文化的方略	能力を判断する手がかり (Descriptors)	タイ語の社会文化的特質の補足的説明 (Thai Supplements)
仏教用語を理解し適切に使う	タイ人との心理的距離を縮める	仏教用語を理解し、適切に使用することができる。	仏教の用語を正しく理解し、日常生活のコミュニケーションに織り込む。前世、現世、来世における転生、死んだ人のために徳を積むといった仏教の世界観に基づく語彙を多用する。
人称表現を効果的に使う	人間関係を対話者の心理をつかむ	社会的立場、年齢、親疎に応じた関係性を総合的に踏まえ適切な人称表現を使用することができる。	相手が喜ぶ、満足、そして応じることができ、対話者とのコミュニケーションを上手く運べる。
終結小辞を効果的に使う	小辞により表現効果を高める	社会的立場、年齢、親疎に応じた関係性を総合的に踏まえ適切な終結小辞を使用することができる。	終結小辞には、話し手と聞き手の属性や両者の関係、聞き手に対する働きかけ、話し手の出来事に対する心的態度を表す機能がある。
口語・文語の文体差を使い分ける	文体差で発話場面に最適化する	場面に応じて、話し言葉と書き言葉を適切に使い分けることができる。	話し言葉と書き言葉で語彙、語順などの各種要素が多岐に渡り、非常に大きく異なる。

C1

言語行動 のタスク	社会文化的方略	能力を判断する手がかり (Descriptors)	タイ語の社会文化的特質の補足的説明 (Thai Supplements)
終結小辞を効果的に活用する	モダリティや語用論的な効果をもつ	多様な終結小辞の文脈に応じた意味を正しく理解し、効果的に多様な終結小辞活用することができる。	終結小辞には、話し手と聞き手の属性や両者の関係、聞き手に対する働きかけ、話し手の出来事に対する心的態度を表す機能がある。
公式な文体で文書を書く	多様な文体を用いて効果を上げる	公式な挨拶文や依頼文などを書くことができる。	書き言葉体特有の表現や定型文がある。
王語を理解する	王族特有の文体を理解する	王族だけが使用する言葉を理解することができる。	王族にしか使用しない語彙がある。
婉曲的表現を効果的に使う	間接的発話行為により礼儀を保つ	婉曲的な表現を理解するとともに、言い難いことを失礼のない形で言うことができる。	苦情を言う、不同意、指摘などをする場合。
仏教の話題を取り上げる	宗教の話題で相手との距離を縮める	宗教、特に仏教の話題をすることができる。	仏教を中心によく話される。特に寺で徳を積んだ経験、仏教の教え、僧侶の説話などは話題となることが多い。タイでは話し相手がムスリムやキリスト教徒であったとしても、お寺で徳を積んだ話などは共感を持って、好意的に聞き入れられる。
目上として気遣いのある文体を使う	目下の対話者に、距離の近さと安心感を与える	目下の相手の緊張を緩和する人称表現や終結小辞、語彙、表現を使うことができる。	目上の者から目下の相手に胸襟を開く態度を示すことで、目下から共感を得られる。
社交的に不同意・注意・批判する	相手の面子を保ちつつ、批判的言語行動をする	批判的言語行動を行うための適切なプロセスと場面設定を行うことができる。	人前で注意・叱責することは相手の面子を損なうことになるので、マイナス意見を言う時は、人前を避け、加えて相手を気遣っている/好意を持っている内容も織り交ぜつつ、相手の意見もきちんと聞くことが求められる。

C2

言語行動 のタスク	社会文化的方略	能力を判断する手がかり (Descriptors)	タイ語の社会文化的特質の補足的説明 (Thai Supplements)
仲介する	社会・文化の差異を理解できる	タイと話者言語の社会・文化の差異を理解し、ビジネスやトラブル解決などの場面で効果的に仲介することができる。	お互いのコミニケーションストラテジーの差異などを理解し、タイのストラテジーに則した形で効果的にコミュニケーションを行う。
ユーモアなどを効果的に使う	人間関係を潤滑にする	物事を円滑に進めるための潤滑油的表現を理解し、発することができる。	タイの社会・文化に基づく笑いのツボや言葉遊びの理解と運用。
慣用句などを効果的に使う	タイ特有の表現で理解を助ける	対話者の理解を深めるための手段として、効果的に慣用句を使うことができる。	自他双方が自身の意図の理解促進のために使用するタイのことわざや慣用句の高度な運用。
タブー的話題を回避する	禁忌的表現を避けて人間関係を保つ	タイでタブーとされる話題を回避したコミュニケーションの展開することができる。	注意を要する話題＝王室批判、政治的主張など。

3. タイ語の人称表現・呼びかけ表現

タイ語では、社会的人間関係が文法的に顕在化して文法・語彙標識に現れ、一種の社会文法として発話の産出に必須の要素となる。高橋(2005:78-80)では、対人配慮に関わる語彙として、敬語、丁寧小辞、呼称を取り上げており、特に呼称については、話し手と聞き手の地位関係、親疎の度合い、性差、状況によって、細かく使い分けられるため、適切に呼称を用いることが出来なければ、円滑な人間関係を作ることができない、と述べている。表 1 の「タイ語暫定版 2018」では、人称表現・呼びかけ表現に関連する語に下線を引いているが、特に A1 レベルにおいては、14 タスク中の 7 タスクが該当している。それらのタスクは、タイ語特有の社会・文化的要素となる「距離の操作」や「人間関係を保つための配慮」

に関連するものとなり、人称表現・呼びかけ表現がポライトネスを調整する機能を担っていることが分かる(スニサー&富盛 2020:103)。

タイ語の人称表現・呼びかけ表現には人間関係が反映され、相手や状況、自身の属性に応じて、それらは多様に変化するため、タイ語のコミュニケーションにおいては重要な要素となる。しかしながら、現在のタイ語教育で教えられている人称表現だけでは、タイ語で円滑なコミュニケーションを取るには十分ではない可能性があると考えている。一例として、日本人留学生がタイの大学で先生との対話の中で、現在の日本のタイ語教育の中では一般的に丁寧な語として教えられている人称代名詞である di-chán「女性が用いる一人称表現」や khun「二人称表現」を使用していたが、これらの語をタイ人の先生に対して用いると、実は失礼な印象を与えることになってしまっており、後日、その先生から筆者へ対して、日本での人称表現の教え方について、質問を頂いたことがある。但し、この事例を裏返せば、人称表現や呼びかけ表現は、それらを適切に運用すれば、円滑な人間関係を構築するのには、非常に有効なツールであることを意味しており、外国語としてのタイ語教育でも重要な要素となると捉えている。そこで、タイ語教育の中に人称表現・呼びかけ表現の運用方法を適切に組み込むことを目的に、まず 2018 年に筆者はタイ語母語話者 580 名を対象に人称表現・呼びかけ表現に関するアンケート調査(内 34 名にはインタビューでの補完調査)を実施し、現在、どのような意識の下で各人称表現・呼びかけ表現が使用されているかを明らかにすることを試みた。

詳細な調査結果については、一人称表現(スニサー2019b:99-117)、二人称表現・呼びかけ表現(スニサー2019c:173-191)、三人称表現(スニサー2020a:269-285)と、各人称表現グループ別に別稿にて示しているが、全人称表現グループ共通で見られた特徴としては、大きく 2 点ある。1 点目として、一人称表現、二人称表現・呼びかけ表現、三人称表現とも、20%以上の回答が見られた使用頻度の高い表現だけでも、それぞれ 7 語以上あり、タイ語の人称表現・呼びかけ表現は非常に多様であるということである。そして、どの人称表現グループにおいても、人称代名詞以外の表現が多く用いられる傾向があり、かつ用いられる語が非常に多様であることである。本調査では、基本は選択式として各種人称表現を回答の選択肢として提示する形式としたが、それに加えて、自由記述式の「その他」の回答も設けた。「その他」には少数意見のものも含め、親族名称や職業名称といった人称代名詞以外の語/句で話し手・聞き手を指示する代名詞代用表現(スニサー2020b:2)を中心に、実に多様な回答を観察することができ、一部の限られた人称代名詞のみでタイ語のコミュニケーションを適切に成立させることが難しいことが伺える。次に 2 点目の共通の特徴としては、人称表現・呼びかけ表現の選択において特に影響が強い要素は、一人称表現、二人称表現・呼びかけ表現では対話者との年齢差であり、三人称表現では発話者と第三者の年齢差であるということである。それに加え、職業や役職といった対話者/第三者の社会的立場の影響も強く働いていることも合わせて確認できた。また、発話者と対話者/第三者の親疎、場面のフォーマル度といった要素も各人称表現グループに共通して、ある程度の影響を有している。一方、発話者や対話者/第三者の性別については、人称表現グループ別に違いが見られる。発話者の性別については、一人称表現では影響が大きいものの、二人称表現・呼びかけ表現と三人称表現での影響は一部のケースを除き、限定的であった。また、一人称表現、二人称表現・呼びかけ表現における対話者の性別や三人称表現における第三者の性別の影響も限定的であるという結果であった。このようにタイ語では対話者や第三者の属性や発話者との上下も含めた人間関係、加えて場面や文脈といった複数の要素が合わさり、適切な人称表現・呼びかけ表現を選択するメカニズムが働いていることが本調査結果から示唆された。

タイ語の人称表現・呼びかけ表現は多様であり、かつ複雑なメカニズムを持って選択されていることから、スニサー&富盛(2020:104)では、タイ語において、適切なポライトネスを保ったコミュニケーションを行うためには、適切な人称表現・呼びかけ表現を使い分ける必要がある、としている。ポライトネスには相手との距離を縮めるポジティブ・ポライトネスと、それとは逆に距離を置くネガティブ・ポラ

イトネスとがあるとされており、タイ語での人称表現・呼びかけ表現の選択においても、対話者/第三者との親疎や場面のフォーマル度が影響することもあり、ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの枠組みはタイ語にも該当すると予測される。さらに、タイ語でのコミュニケーションにおいては、対話者/第三者との親疎といった「横」の人間関係に加え、年齢差や社会的立場に基づく「縦」の人間関係が非常に重要となる。つまり、タイ語での適切な人称表現・呼びかけ表現も含めたポライトネス・ストラテジーを理解するためには、年齢差・社会役割を表示する上下関係による縦軸、そして対話者との距離を示す横軸の 2 軸が必要となり、スニサー&富盛(2020:104)ではこの 2 軸をそれぞれ「垂直的ポライトネス」と「水平的ポライトネス」と呼ぶこととした。特に垂直的ポライトネス観点で、相手との上下関係の位置決めを行うことは、タイ語の人称表現・呼びかけ表現の選択において非常に重要であるからこそ、この 2 軸のポライトネス構造をタイ語教育プログラムの中に組み込みことが効果的であると考えている。

4. 人称表現・呼びかけ表現に関する教授方法案と課題

人称表現・呼びかけ表現のタイ語学習プログラムの反映方法として、本稿では大きく 2 つの点を提案したい。まず 1 点目は、人称表現・呼びかけ表現の選定基準の学習である。第 3 章で述べた筆者が実施した人称表現・呼びかけ表現の意識調査では、回答の選択肢となる人称表現・呼びかけ表現を検討するに当たって、複数のタイ語教材[3]を参照したが、そこでの説明はニュアンスとして最も近い日本語訳やその語の意味の説明にとどまるものが大半を占めている。例えば、二人称代名詞の khun について「丁寧な二人称表現」、「あなた」といった説明のみでの教材への記載、または同様の内容で指導者が教授するだけでは、第 3 章の事例で示した通り、学習者が実際のタイ語でのコミュニケーションで誤解を招きかねないという懸念がある。タイ語特有の要素の 1 つとして、特に人称表現・呼びかけ表現については、語彙的意味に加え、場面ごとに各表現がどのような選定基準・優先順位・プロセスによって、使用される表現が決定されるかを可視化した内容を教育プログラムに組み込むことで、タイ語学習者がより適切に人称表現・呼びかけ表現を運用していくことが可能になるのではないかと思われる。そして、人称表現・呼びかけ表現の選定基準の教授方法に「垂直的ポライトネス」と「水平的ポライトネス」の 2 軸から成るタイ語特有のポライトネス構造を援用することが本稿での 2 点目の提案となる。ポライトネスの概念を援用し、人称表現・呼びかけ表現の選定メカニズムへの理解を深めることで、各語のプラグマティクス的側面からの基本的な理解が深まり、実際のコミュニケーションにおける応用力も向上するものと考えらえる。これら 2 点を踏まえ、人称表現・呼びかけ表現に関する教授法案について示していきたい。注意点としては、ここで提示する各人称表現の教授法案については、スニサー(2019b:99-117)、スニサー(2019c:173-191)、スニサー(2020a:269-285)で示した 2018 年に筆者が実施した調査結果を中心に据えた内容であり、最終的には、後述の課題を踏まえた上での改善が必要と考えている。

4.1. 人称表現・呼びかけ表現の選定基準

まず、一人称表現の調査結果であるが、スニサー(2019b:113)によると、一人称表現の選択において影響力が最も強い要素は、発話者の性別と対話者との年齢差となる。対話者との年齢差が明確な場合、使用される一人称表現はある程度絞られる傾向が見られた。対話者との親疎については、対話者が同年代の場合、相手によって最も多様に使い分けがなされている。これは年齢差の次に来る要素で決定的なものがなく、発話者と対話者の関係性が不明瞭かつ不安定であるが故に、相手によって多様な人称表現を

[3] 参照先は、参考文献にある次の文献となる。“*Thai reference grammar : the structure of spoken Thai* (Higbie, Thinsan 2003)”、“*A Reference Grammar of Thai* (Iwasaki, Ingkaphirom 2009)”、『タイ語の基礎 増補新版(三上 2014)』、『表現を身につける初級タイ語(スニサー2016)』、『タイ語(宮本、村上 2014)』、“way-yaa-kɔɔn thay (Navavan2016) ”

使い分けざるを得ないためと考えらえる。また、対話者の性別の違いやフォーマルな場面/カジュアルな場面の差異による影響はそれ程大きくない結果であった。これらの点を踏まえ、一人称表現については、次のような選定基準を示すことが可能であると考える。

一人称表現選定基準

(1)対話者の年齢が明らかな場合

【発話者＝男性】

・ 対話者が年上＝phŏm を使用。

・ 対話者が年下＝phîi、phŏm を使用。

【発話者＝女性】

・ 対話者が年上＝nŭu、ニックネームを使用。

・ 対話者が年下＝phîi を使用。

(2)対話者が同年代の場合

【発話者＝男性】

・ 自身と対話者の属性と関係性に鑑み、いずれかの語を使用。

phŏm ： 幅広く使用可。

raw ： 幅広く使用可。比較的親しくない対話者に対して。

kuu ： 若年層が仲間内で使用。乱暴な言葉遣いとなるため、注意が必要。

【発話者＝女性】

・ 自身と対話者の属性と関係性に鑑み、いずれかの語を使用

ニックネーム ： 幅広く使用可。比較的親しい対話者に対して。

kháw ： 幅広く使用可。比較的親しくない対話者に対して。

raw ： 幅広く使用可。比較的親しくない対話者に対して。

kuu ： 若年層が仲間内で使用。乱暴な言葉遣いとなるため、注意が必要。

(3)個別ケース

・ 発話者が次の職業/役職の場合は、職業名も使用。

先生(教職)、医者　など

なお、(3)個別ケースについては、本調査結果からは得られなかった内容であるが、後述の二人称表現、三人称表現の内容に鑑み、タイ語母語話者として必要と判断し、追記している。また、前述の通り、対話者の性別の違いやフォーマルな場面/カジュアルな場面の差異は影響力が小さいため、ここでは反映していない。

次に二人称表現・呼びかけ表現であるが、スニサー(2019c:188-189)によると、一人称表現と同様、二人称表現の選択において影響力が最も強い要素は、対話者との年齢差となる。なお、一人称表現では大きな影響力を持つ発話者の性別については、二人称表現では一部のケースを除き影響力はそれ程大きくないという結果であった。対話者が年上であることが明確である場合、発話者の性別や年齢、そしてフォーマル/カジュアルといった場面設定を問わず、最も選択される表現は phîi「兄/姉」といった親族名称で、さらに対話者との距離が近い場合は、そこにニックネームなどの固有名詞を加えることもある。カジュアルな場面において、年齢が大きく離れた対話者に対しては luŋ「おじさん」、pâa「おばさん」を意味する親族名称も多く用いられている。これらの親族名称は実際の親族だけでなく、疑似関係の場合でも多用されている。年下の場合は、ニックネームや nɔ́ɔŋ「弟/妹」が多くのケースで用いられている。一方で、対話者が同年代になると、発話者の性別や年齢、対話者の性別、対話者との親疎、そして場面設定が複

雑に反映されることになる。例えば、mɯŋ は発話者が若い世代の男性と女性が親しい男性の対話者に対して最も使用する表現であり、thəə はあまり親しくない女性の対話者に対して女性だけでなく男性も使用する表現であった。また kɛɛ については、親しい人へだけでなく、親しくない/知らない同年代の対話者にも同様に使用されている。呼びかけ表現においても、対話者との年齢差の影響力は強く、phîi「兄/姉」、nɔ́ɔŋ「弟/妹」が多用されることに加え、二人称表現では使用されるケースは限られている khun が広範囲で選択されることが明らかになった他、年齢差が不明瞭の場合、失礼にならないようにゼロ代名詞での対話や、対話者が年上であることを示す phîi「兄/姉」を同年代や年下と思われる対話者へも使用しているという結果も見ることができた。また、「先生(教職)」や「医者」など、一部の職業や役職については、二人称表現・呼びかけ表現として、職業名や役職名を使用することが最も適切であるということも確認できた。これらの点に基づく、二人称表現・呼びかけ表現の選定基準は次の通りとなる。

<u>二人称表現・呼びかけ表現選定基準</u>

(1)対話者の年齢が明らかな場合

・ 対話者が年上＝ phîi を使用。
　　対話者と親しい場合や親しくなりたい場合、phîi＋ニックネームも使用。
　　インフォーマルな場面で、大きく年齢が上の人に対しては luŋ、pâa も使用可。

・ 対話者が年下＝nɔ́ɔŋ、ニックネームを使用。

(2)対話者が同年代の場合

・ 自身と対話者の属性と関係性に鑑み、いずれかの語を使用。

ニックネーム	：	使用範囲が最も広く、誰に対しても使用可。
kɛɛ	：	大人は親しい対話者へ使用するが、若年層は親疎に関係なく幅広く使用可。
thəə	：	親しくない/知らない女性に対して比較的多く使用可。
khun	：	二人称表現としては、知らない人などに使用する堅苦しい表現。 呼びかけ表現ではフォーマル/カジュアルな場面で幅広い対象に使用可。
mɯŋ	：	若年層が仲間内で使用。乱暴な語であるため、使用には注意が必要。

(3)個別ケース

・ 対話者が次の職業/役職の場合は、職業名/役職名を使用。呼びかけ表現としても使用可。
　　先生(教職)、医者、マネージャー、仏教の僧侶　など

・ 仏教の高僧や大企業のトップなど、社会的立場が極めて高い人に対しては thâan を使用。

・ 呼びかけ表現で対話者との年齢差が不明瞭の場合、phîi を使用することも可。
　もしくは呼びかけ表現は敢えて使用せず、thôot náʔ khráp/kháʔ「すいません」のみを用いることも可。

三人称表現についても、スニサー(2020a:280-281)での調査結果を見ると、最も強い影響のある要素は一人称表現や二人称表現と同様、発話者と第三者の年齢差となる。但し、一人称表現や二人称表現とは異なり、三人称表現では対象者を特定する必要がある性質上、ニックネームなどの固有名詞を使用することが多い。第三者が発話者より年上の場合は、疑似関係も含めた親族名称 phîi「兄/姉」を名前の前にタイトルとして付加し、垂直的ポライトネスを示す必要がある。そして、第三者が同年代であれば、ニックネームだけを用いるという回答が多数を占めるが、第三者が年下の場合は、ニックネームの前に nɔ́ɔŋ「弟/妹」を意味する親族名称をタイトルとして付加するという回答も見られた。疑似関係を含めた親族名称以外では、敬称としてのタイトル khun「～さん」やより敬意が高い敬称となるタイトル thâan「～様」を名前の前に付加するが、これはネガティブ・ポライトネスに作用する。また、「先生(教職)」

や「医者」など、一部の職業や役職については、三人称表現として、職業名/役職名を使用することがより適切であるということも調査結果から確認できた事象となる。一方、人称代名詞について、参照した教材では kháw が最も一般的で汎用性がある三人称代名詞として総じて説明されているが、回答率はそれ程高いものではなかった。kháw は確かに第三者の性別や発話者との年齢差を問わずに、幅広い対象に対して使用は許容され、調査結果でも広い範囲で回答が確認できたが、アンケートの補完インタビューでは、非常に無機質な印象となるといった声が聞かれ、文脈によっては対話者に悪印象をもたらす可能性があることも留意しなくてはならない。その他の三人称代名詞としては、thəə、kɛɛ、man、thâan といった語は対象となる第三者や場面によってはある程度の高い回答率が見られた。また、第三者が年齢や社会的立場によって、「縦」の関係で発話者より上に位置する場合は、phîi+名前「兄/姉＋名前」、thâan+名前「～様」、thâan「(高い敬意を示す三人称代名詞)」、ʔaa-caan「(教職の)先生」、khun mɔ̌ɔ「お医者さん」といった語がカジュアル/フォーマルの場面を問わず多く用いられており、三人称表現でも目上の人には敬意つまりは垂直的ポライトネスを示す表現を用いることが求められることが示された。そして、社会人の回答結果では、自組織・他組織のトップに関する回答で、大きな差異が見られなかったことから、内外問わずにタイ語のポライトネスは上下の関係を適切に示すことが言語的規範としてある可能性が考えられることも留意しなくてはならない。これらを踏まえた、三人称表現の選定基準は次の通りとなる。

<u>三人称表現選定基準</u>

(1)第三者の年齢が明らかな場合

・ 第三者が年上＝ phîi＋ニックネームを使用。
　　文脈上対象者が明らかな場合は、phîi のみも可。

・ 第三者が年下＝ ニックネームを使用。
　　親しみを込める場合は、nɔ́ɔŋ＋ニックネーム。
　　若い世代が親しい人に対しては man も使用。

(2)対話者が同年代の場合

・ 自身と第三者の属性と関係性に鑑み、いずれかの語を使用。

ニックネーム	：	使用範囲が最も広く、誰に対しても使用可。
kháw	：	使用範囲が最も広く、誰に対しても使用可。 但し、無機質な印象があり、失礼となるケースもある。
thəə	：	対象者の性別は問わないが、発話者が女性の場合に使用することが多い。
man	：	カジュアルな場面で使用可。

(3)個別ケース

・ 第三者と発話者の距離が遠い場合は、khun＋本名「～さん」を使用。

・ 第三者が次の職業/役職の場合は、職業名/役職名を使用。
　　教職、医者、マネージャー　など

・ 第三者が仏教の高僧や大組織のトップなど、社会的地位が非常に高い場合は、所属組織の内外を問わず、thâan＋本名「～様」を使用。
　文脈上、第三者が特定できる場合は、三人称代名詞 thâan のみでの使用も可。

4.2. 人称表現・呼びかけ表現の学習におけるタイ語特有のポライトネス構造の活用

前節では人称表現・呼びかけ表現の選定メカニズムを言葉で説明したが、さらに視覚的な手法も加えることで、各語の意味範囲や実際の運用に向けて学習者の理解をより深めるのに効果的になると考えており、そこで有用となり得るものがタイ語特有のポライトネス構造である。具体的には「垂直的ポライ

トネス(Vertical Politeness)」と「水平的ポライトネス(Horizontal Politeness)」の 2 軸から成るタイ語特有のポライトネスの概念を可視化した上で、各人称表現・呼びかけ表現の位置付けを示すことで、各語の相対的意味の理解を深める一助になるのではと考えている。

図 1 は、スニサー&富盛(2020:105)の中で、ポライトネスの考えを用いながら、人称表現の意味・機能を可視化して示すために提示したタイ語のポライトネス構造の概念図となる。第 3 章で述べた通り、タイ語では対話者との親疎といった「横」の人間関係に加え、年齢差や社会的立場に基づく「縦」の人間関係が非常に重要となる。タイ語におけるポライトネスの仕組みを可視化するためには、対話者との上下関係を示す縦軸「垂直的ポライトネス(Vertical Politeness)」と対話者との心的距離を示す横軸「水平的ポライトネス(Horizontal Politeness)」の 2 軸が必要となる。例えば二人称表現において、対話者が発話者よりも年上であれば、垂直方向で上方に位置し、この状態を「アッパー・ポライトネス(Upper Politeness)」と本稿では仮称する。逆に対話者が発話者よりも年下であれば、「ローワー・ポライトネス(Lower Politeness)」と呼ぶ。水平方向については、親しければ右寄りに位置することし、右方向が「ポジティブ・ポライトネス(Positive Politeness)」、左方向を「ネガティブ・ポライトネス(Negative Politeness)」とする。なお、二人称表現の場合、図 1 中では発話者は縦軸と横軸の交差点に位置するものとする。

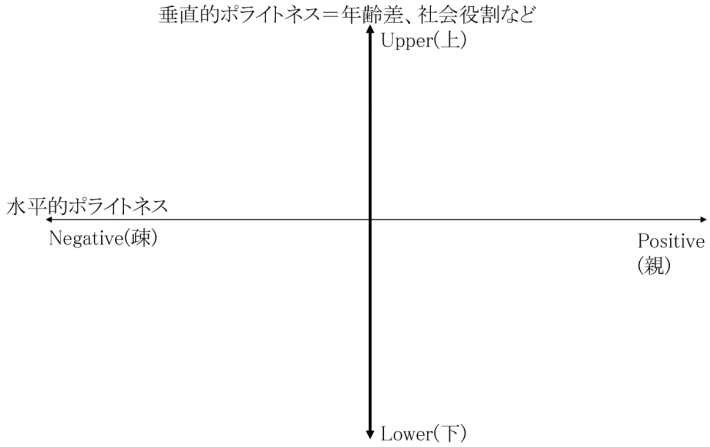

図 1 タイ語の人称表現・呼びかけ表現におけるポライトネス構造概念図

スニサー(2019c:188-189)によると、タイ語の二人称表現を決定する要素は複数あるが、まず対話者が明らかに発話者より年齢が上である場合、相手が年上であることを示す表現を用いることにより、上下の位置関係を明確にする必要がある。そのための二人称表現のひとつとなる phîi「兄/姉」を用いて、「垂直的ポライトネス(Vertical Politeness)」の中の「アッパー・ポライトネス(Upper Politeness)」を示さなくてはならない。そして、心理的距離が近い、つまり親しい人間関係を示したい場合には、この語の後に、ニックネームも付加する。これは相手との距離の操作をする「水平的ポライトネス(Horizontal Politeness)」の作用であり、その中でも両者の心理的距離が近いことを示す、もしくは近付けたいという意図があるので、「ポジティブ・ポライトネス(Positive Politeness)」が働いていると言えるであろう。また、luŋ/pâa「おじさん/おばさん」は、親しみを込めて大きく年の離れた年長者に対してよく使用される人称表現・呼びかけ表現となるが、これはひとつの語で同時に「アッパー・ポライトネス(Upper Politeness)」と「ポジティブ・ポライトネス(Positive Politeness)」を示すことが可能な表現となる。なお、日本語では状況によっては、「おじさん/おばさん」、「お兄さん/お姉さん」は、年下の対話者に対しても使用することもあるが、タイ語では明らかに年下と分かる相手には原則使用しない。これらの語を図 1 に組み入れて示したのが図 2 となる。

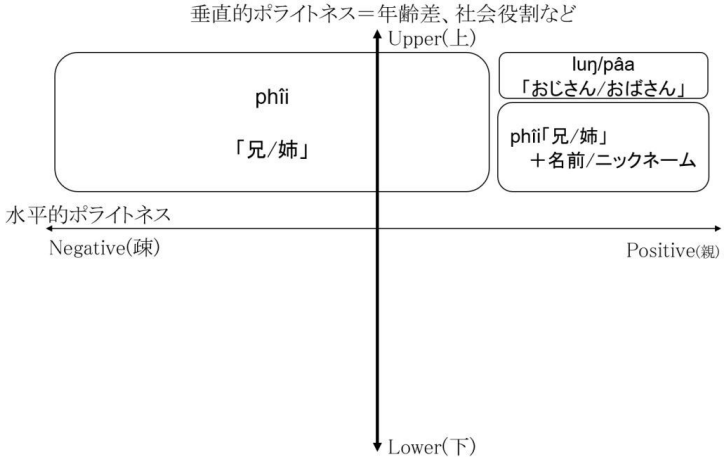

図 2 対話者が年上の場合のタイ語・二人称表現におけるポライトネス構造概念図

このように、単に言葉による説明だけではなく、視覚的ツールも活用することで、学習者が各人称表現・呼びかけ表現の意味をより相対的かつ俯瞰的に理解する一助となると考えている。ただ、ここでの注意点としては、これら年長者への各二人称表現がプロットされている位置・範囲は絶対的なものではなく、その位置が変化する語もあるということである。例えば、図 2 で用いた phîi「兄/姉」、luŋ/pâa「おじさん/おばさん」の位置付けは、実際には親族ではない一般的な人に使われた場合、つまりは疑似親族関係を前提としたものである。これに対して、対話者が実際の親族の場合には、図の中の luŋ/pâa の位置は異なってくる。まず、年齢差がそれ程大きくない場合でも、親族としての「おじさん/おばさん」の関係であれば、luŋ/pâa を使う必要がある。さらに、実際の親族に対しては、より距離の近さを示すことも求められるため、luŋ/pâa の後に名前やニックネームも付加することが多い。実際の親族である「おじさん/おばさん」に対応する人称表現・呼びかけ表現は図 3 の位置関係となり、図 2 で示した疑似親族名称での使用範囲[4]をとは大きく異なることが分かる。こういった意味の変化の説明も、図 2 と図 3 を視覚的に比較参照することで、同じ人称表現・呼びかけ表現でも、発話者と対話者との関係性によって、その語のポライトネス機能が異なって作用することを、より学習者が理解し易い手法で明示することが可能となるものと考えている。

[4] 比較のため、図 3 中にも図 2 における luŋ/pâa の使用範囲を点線枠で掲載している。

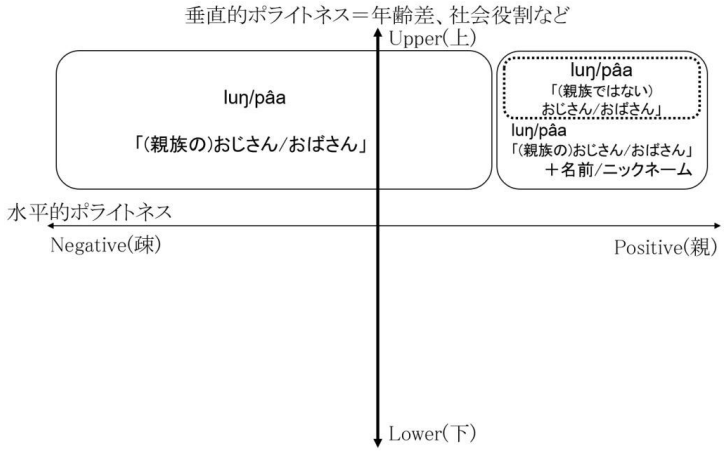

図 3 対話者が年上の親族の場合のタイ語・二人称表現におけるポライトネス構造概念図

また、二人称表現の中で、対話者が同年代のケースも見ていきたい。同年代の場合、年齢による「垂直的ポライトネス(Vertical Politeness)」がなく、基準となる軸が水平の 1 軸のみとなる。そのため、対話者との関係性が年上や年下の相手の場合とは異なり、年齢という最も強い影響力のある要素がないため、対話者との親疎や対話者の性別などの影響度が強まり、使用される表現がより多様化しているのが特徴的である。図 4 では同年代の対話者に対して使用される二人称表現の中で、調査結果の中で回答率が高かった表現をプロットしているが、相手との距離に応じて使い分けられていることが分かる。但し、実際には発話者の年齢や性別、また対話者の性別によって、使用される表現がより多様化していることは留意しなくてはならないが、本稿では詳述しない。なお、図 4 中にある二人称表現について、ニックネーム以外は、全て二人称を意味する人称代名詞となるが、語釈として「あなた」、「君」、「おまえ」といった日本語での近いニュアンスの二人称表現を記すと誤解を招く可能性があるため、敢えて図 4 では語釈は表記しないものとする。

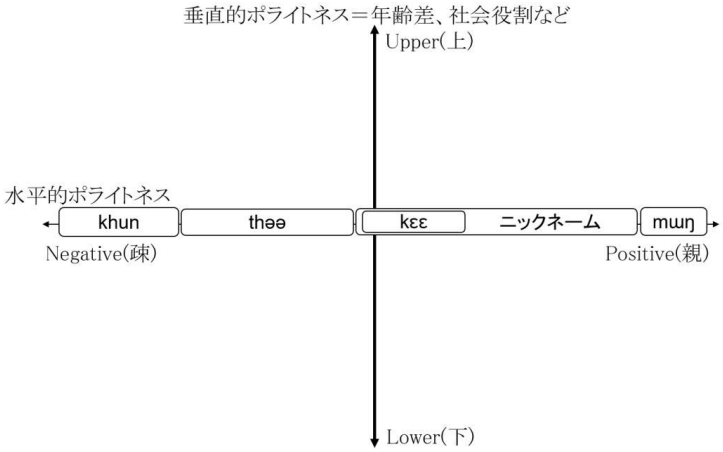

図 4 対話者が同年代の場合のタイ語・二人称表現におけるポライトネス構造概念図

一人称表現の場合も、プラットフォームとなるポライトネス構造概念図は、二人称表現と同様、図 1 を使用できるものと考えている。但し、一人称表現の場合は、対話者が縦軸と横軸の交差点に位置し、発話者が図の中で各所にプロットされることになる。発話者が女性で、対話者が年上を示すケースを事例として掲載したのが図 5 となる。スニサー(2019b:115)によると、対話者が年上の場合、ニックネーム

もしくは nǔu という 2 語が回答の大半を占めるものであった。nǔu とは「ねずみ」の意味のタイ語であるが、女性の一人称表現、もしくは二人称表現で、「ローワー・ポライトネス(Lower Politeness)」を示すケースで広く使用されている語となる。ニックネームと nǔu の運用における差別化ポイントとしては、nǔu は年齢差や社会的立場の差が大きい場合に使用されることが多い傾向があるものと筆者としては捉えている。

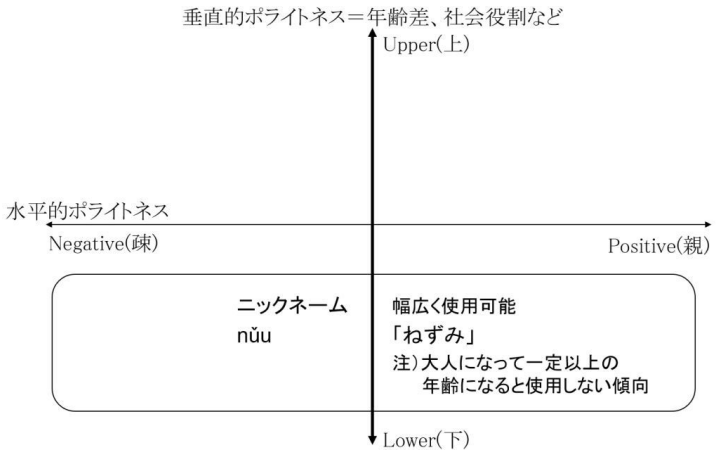

図 5 対話者が年上の場合のタイ語・一人称表現におけるポライトネス構造概念図
【発話者＝女性】

次に三人称表現についても、同様に図 1 に用いることが可能であるが、縦軸と横軸の交差点に来るのは発話者となり、図中の各所にプロットされるのが第三者となる。三人称表現では、第三者が年下の場合を事例として図 6 に掲出する。スニサー(2020a:280-283)によると、対話者が年下の場合、一人称表現や二人称表現とは異なり、三人称表現では対象者を特定する必要がある性質上、ニックネームなどの固有名詞を使用することが多く見られたが、nɔ́ɔŋ「弟/妹」を意味する親族名称をタイトルとして付加するという回答も見られた。また、特に若い世代では親しい関係の人を指し示す場合は、ニックネームの他にも、man という代名詞を用いるという回答も一定数見られ、これらを図示したものが、図 6 となる。

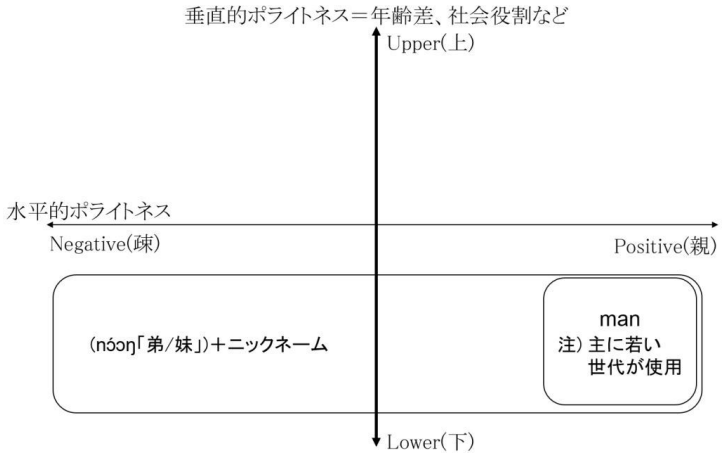

図 6 第三者が年下の場合のタイ語・三人称表現におけるポライトネス構造概念図

ここまでは「垂直的ポライトネス(Vertical Politeness)」が作用する場合を年齢差による上下関係という側面で見てきたが、相手の属性によっては、職業名などの使用によって「垂直的ポライトネス(Vertical Politeness)」を示さなくてはならない場合もある。タイ社会に深く根付いている仏教の僧侶に対しては、僧侶を意味する言葉を使用するのが一般的であるが、僧侶に対して使用する人称表現は細分化されており、二人称表現では発話者と対話者との年齢差に応じて、lŭaŋ taa、lŭaŋ phɔ̂ɔ、lŭaŋ phîi などを使用している。他にも、教職者や医者などは社会役割としては、タイでは社会通念的に上位に位置しており、年齢に関係なく職業名で呼ぶことにより「垂直的ポライトネス(Vertical Politeness)」を示すことが言語規範として存在している。

タイ語における多様かつ複雑な人称表現・呼びかけ表現の特徴を適切に説明するためには、本稿で提示したようなポライトネス構造概念図のようなイメージを活用したツールを都度用いることが、学習者の理解を深める上で有用になるのではと考えている。

4.3. 人称表現・呼びかけ表現の教育プログラム反映に向けた課題

今後、包括的に人称表現・呼びかけ表現の学習を外国語としてのタイ語教育プログラムに組み入れていくにはいくつかの課題がある。まず、人称表現・呼びかけ表現として使用される語の検証である。前述の通り、タイ語の人称表現・呼びかけ表現は多様性に富み、そこには人称代名詞に加え、親族名称や職業名称、役職名称などの代名詞代用表現もよく使用されている。ʔaa-caan「先生(教職)」や mɔ̌ɔ「医者」などは、よく知られており、現在の学習教材にも対話例の中にも頻繁に登場する語であるが、他にもタイ語では人称表現・呼びかけ表現として使用されている代名詞代用表現が多数存在する。しかしながら、各語の運用方法の詳細は未整理の状況である。例えば、phûu-càt-kaan「マネージャー」や hŭa-nâa「上司」といった役職名称は、二人称表現では使用されるものの、一人称表現としては使用しないという傾向が見られるなど、語によっては使用できる人称に制限があるものもある。また、語自体が敬意の意を有する職業名称の khruu「先生(教職)」や mɔ̌ɔ「医師」は、呼びかけ表現の場合、語単体での使用法と敬称タイトル khun 付きの使用法のいずれも可能であるのに対し、phûu-càt-kaan「マネージャー」や hŭa-nâa「上司」といった役職名称は、立場が上の者への呼びかけ表現であるにも関わらず、一般的には敬意を示すタイトル khun を付加した形で使用することはないといったケースもある(スニサー2020b:3)。今後、人称表現・呼びかけ表現を外国語としてのタイ語教育プログラムの中へ適切に組み込んでいくには、特に代名詞代用表現の実態を精査し、広範かつ実用的な形で教育プログラムへ組み込んでいく必要がある。さらに、第 2 章で示した「タイ語暫定版 2018」では、A1～A2 レベルに人称表現・呼びかけ表現に関する内容が集中していたが、より複雑なコミュニケーションになるほど、これらの表現の細かな使い分けが微細なニュアンスを表す役割を果たすものと考えられ、学習段階に応じた人称表現・呼びかけ表現の段階的学習方法も検討していく必要があると考えている。

5. おわりに

CEFR は、外国語としてのタイ語教育のグローバル・スタンダード化、さらにはグローバル・スタンダード化による全体的な底上げのために、有用なツールになる可能性を大いに秘めているものの、CEFR をそのままタイ語教育に当てはめることは適切ではないと考えている。CEFR をタイ語教育に適用するに当たっては、コミュニケーション的側面からの社会・文化的要素を鑑みる必要がある。考慮すべきタイ語特有の社会・文化的要素として、スニサー(2017b:242-250)では、(1)相手との位置関係の確認、(2)距離の操作、(3)人間関係を保つための配慮、(4)相手に負担をかける場合の働きかけ、(5)文体の操作を提示した。そして、タイ語を運用する際において、これらの要素を反映させる上で効果的なツールの 1 つとなるが人称表現と呼びかけ表現であると本稿では述べてきたが、効果的なツールは勿論、他にもある。

タイ語においては、終結小辞も非常に重要なタイ語運用のツールである。終結小辞は多様で、かつ高度な運用になればなるほど、微細な意味を表現する重要な役割を担っており(スニサー2017c:135)、適切な学習段階において、包括的かつ系統的に教授していく必要がある。今後、終結小辞についても、各語の運用や意味などの詳細を精査し、終結小辞に関する学習において、タイ語特有のポライトネス理論の活用可否についても検証を試みたい。今後、タイ語特有のポライトネスの考え方や人称表現・呼びかけ表現の学習方法を外国語としてのタイ語教育のグローバル・スタンダード・プログラムの中に組み込んでいくための考察を深めていくとともに、こういったポライトネスや人称表現・呼びかけ表現の視点がアジア諸言語で共通する言語運用能力評価基準を検証する上で、汎用的に活用できる可能性についても探っていきたい。

参考文献

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2016.『表現を身につける初級タイ語』三修社

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2017a.「CEFR を参照とした日本人タイ語学習者向け教材に関する考察 －「外国語としてのタイ語教育」スタンダード開発に向けて－」,『東京外国語大学論集 no.94』, pp.169 -188.

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2017b.「タイ語教育における CEFR 適用に向けたタイ語特有の社会・文化的要素に関する考察」,『東京外国語大学論集 no.95』, pp.231-250.

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2017c.「タイ語話し言葉コーパスから見た「語用論的終結小辞」」『アジア・アフリカ言語文化研究』94 号, pp.111-136.

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2018.「タイ語教育スタンダード化に向けての効果的な CEFR 導入の検証」,『平成 27-29 年度 科学研究費助成事情 基礎研究(B) 研究プロジェクト アジア諸語の社会･文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 －成果報告書(2015-2017)』, pp.105-115.

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2019a.「CEFR を参照した日本人タイ語学習者の到達度レベルに関する考察 －学習者アンケート調査分析から－」,『東京外大 東南アジア学』第 23 号, pp.20-36.

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2019b.「タイ語での一人称表現の使用意識とタイ語教育への活用」,『外国語教育研究 外国語教育学会紀要 22 号』, pp.99-117.

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2019c.「タイ語での二人称表現の使用意識とタイ語教育の課題」,『東京外国語大学論集 99 号』, pp. 173-191.

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2020a.「タイ語での三人称表現の使用意識とタイ語教育の課題」,『東京外国語大学論集 100 号』, pp. 269 -285.

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2020b.「タイ語での代名詞代用表現・呼びかけ表現に関する考察」,『東京外大 東南アジア学 第 26 号』, pp.1-23.

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン、富盛 伸夫, 2020.「タイ語教育における社会文化的適切性と CEFR への適用 －ポライトネス理論の視点から見た人称詞・呼称表現を中心に－」,『外国語教育研究 外国語教育学会紀要 23 号』, pp.96-114.

ソ アルム. 2014.「韓国の外国語教育及び外国語としての韓国語教育における CEFR 応用の現状に関する実態調査」,『科学研究費補助金研究 基盤研究(B) 研究プロジェクト中間報告書(2012-2013)「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」』, pp.39-50.

高橋清子. 2005.「タイ語の配慮表現」,『多言語多文化時代の文化リテラシー：配慮表現をめぐって (科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書, 佐々木倫子編, 桜美林大学)』, pp.77-88.

高橋清子. 2014.「「外国人のためのタイ語教育」における初級文法の扱い」.『神田外語大学紀要 第 26 号』, pp.465-488.

富盛伸夫. 2020.「社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって：アジア諸語

版の試み（2018－2019）－アジア諸語を対象にした CEFR 受容で見えてきたものと捉えがたいもの－」.『「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」－中間報告書（2018-2019）－』, pp.73-112.

富盛伸夫、Yi Yeong-il . 2016.「アジア諸語学習者における CEFR 自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力に関わる諸問題 －学習者アンケート調査(2014)の分析から－」,『外国語教育研究 外国語教育学会紀要 No.19』, pp.1-19.

三上直光. 2014.『タイ語の基礎 増補新版』白水社

宮本マラシー、村上忠良. 2014.『タイ語 (世界の言語シリーズ)』大阪大学出版会

Navavan, Bandhumedha.2016. "*ไวยากรณ์ไทย way-yaa-kɔɔn thay*". Chulalongkorn University

James Higbie, & Snea Thinsan. 2003. "*Thai reference grammar: the structure of spoken Thai*" . Orchid Press

Shoichi Iwasaki & Preeya Ingkaphirom. 2009. "*A Reference Grammar of Thai*" Cambridge. Cambridge University Press

執筆者連絡先:sunisa@tufs.ac.jp

本稿は科学研究費助成事業基盤研究（B)「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」（2018 年度−2020 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686）の研究成果のひとつとして公開するものである。